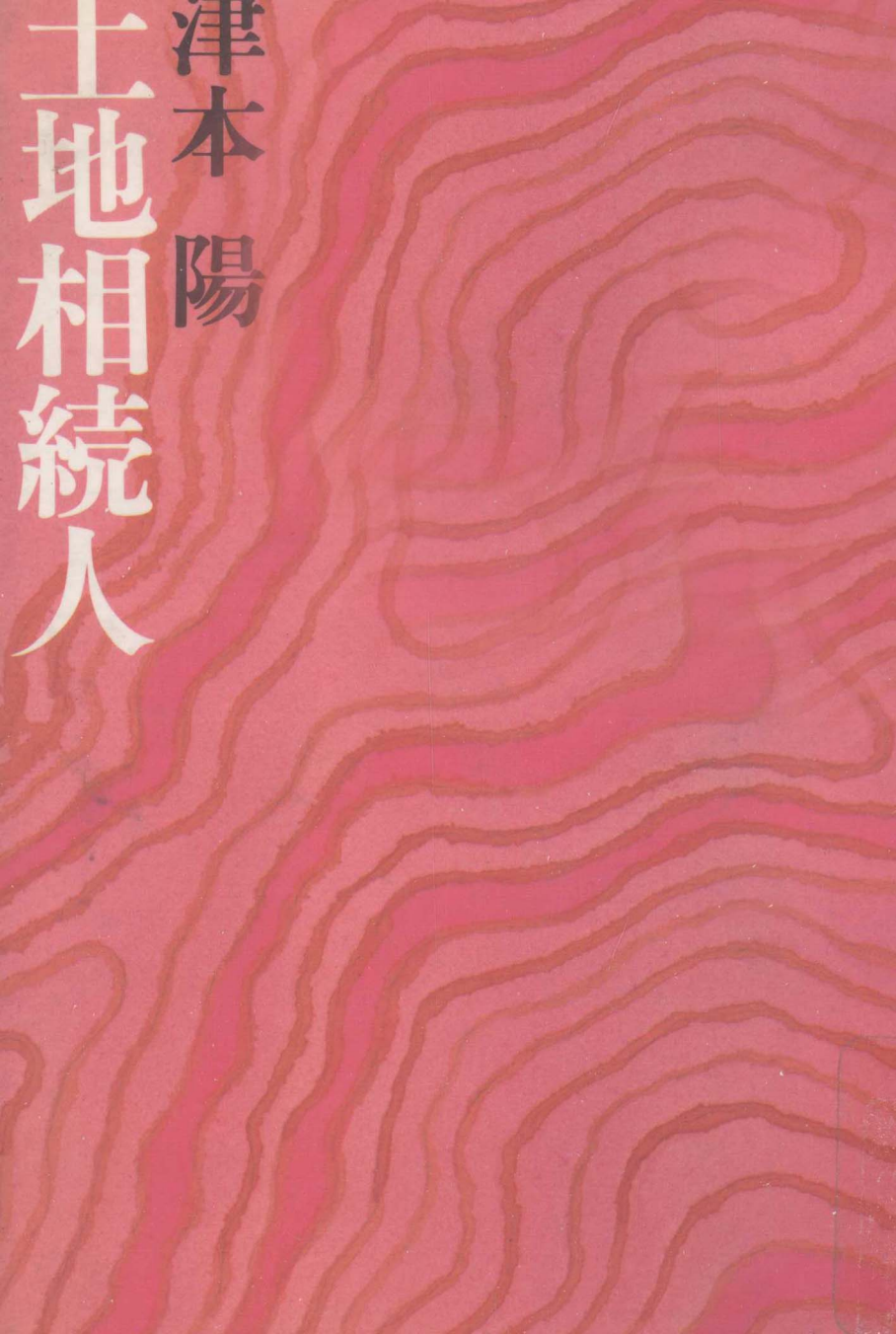
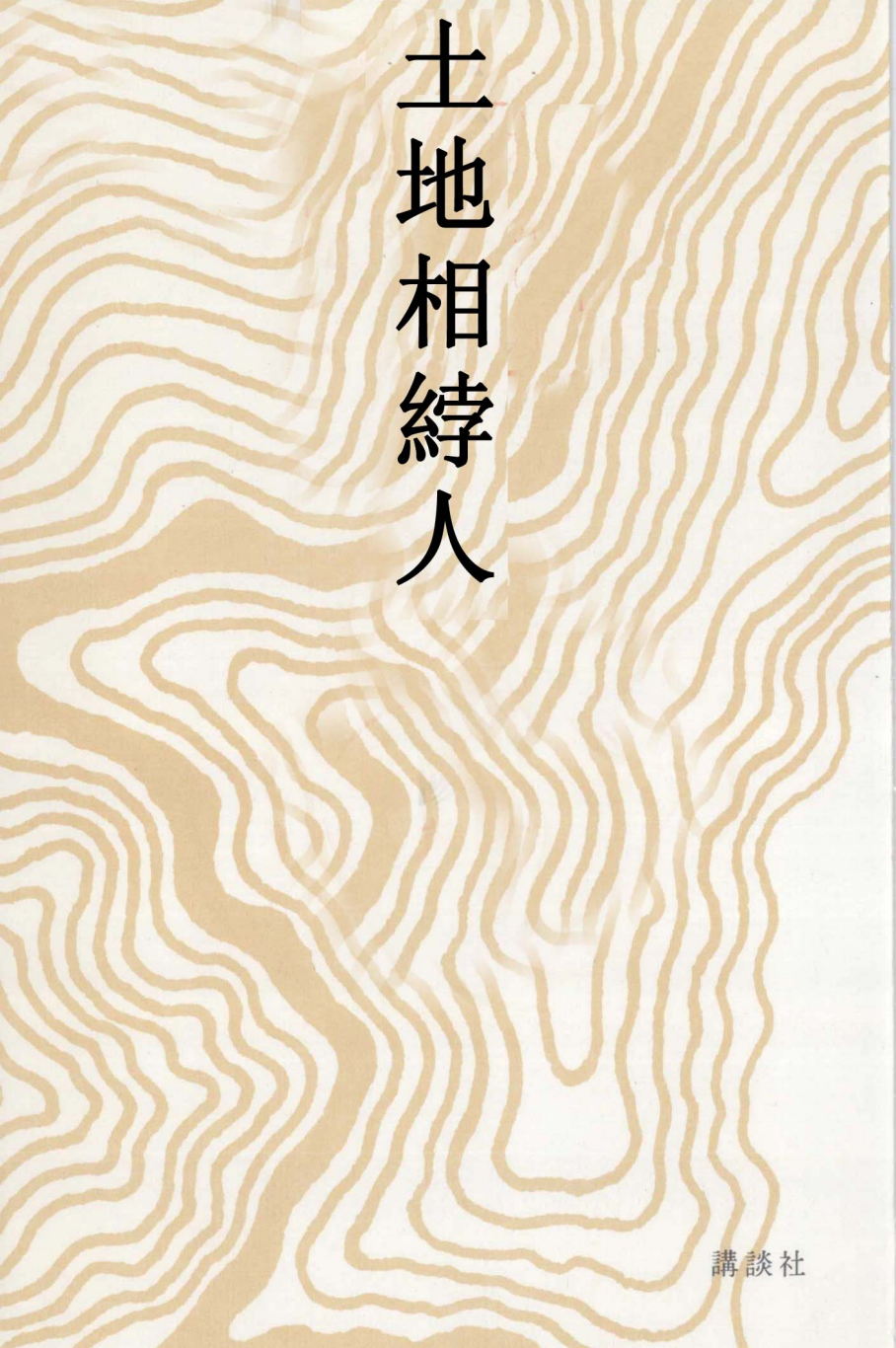


津本陽

土地相続人





土地相縛人

講談社

津本 陽 (つもと・よう)

昭和4年和歌山市生れ、東北大学法学部卒。

昭和40年、同人誌「VIKING」に加わる。

昭和53年、「深重の海」で第79回直木賞受賞。

現在、和歌山市在住。

土地相続人

昭和五十四年十一月二十日 第一刷発行

著 者 津本 陽

発行者 野間省一

発行者 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号 一―二
電話東京〇三三九四五一―二二二(大代表)／振替東京八一三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定 価 八八〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません
© Yo Tsumoto 1979, Printed in Japan

目次

土地相続人

5

老女の土地

47

夢のマイホーム

89

弱い獣

121

沈む石

161

いちごの記憶

197

あとがき

226

装幀
辻村益朗

津本陽作品集

土地相続人

土地相續人

森田敬市が、父の遺産として紀州白浜の海岸地約二千五百坪の土地を相続したのは、昭和四十年春のことであつた。

脳梗塞で眠るように八十歳の人生を終えた父は、時価にして五、六億円にのぼる財産を残していた。相続権者は敬市のほかに母と兄の政雄がいた。

相続法に従えば、父が遺言の類を残していないかぎり、母と二人の息子が遺産を二分して相続することになる。森田家の場合、相続権者の人数が少なかったので、遺産分割の協議はこれという紛議もなく整つた。

兵庫県山芦屋にある約三百坪の本宅と、二十世帯が入っている貸マンションは母の名義になつた。敬市と政雄はまず多額の証券類を等分に分けあつた。二人とも会社員であるため、管理に手のかかる不動産よりも、現金に換えやすいそれらのものから手に入れたがつた。

あとに二筆の不動産が残つた。京都市西郊にある三町歩の雑木山と、白浜の海岸地である。「どっちゃを取るかは、あんたらで相談して決めなはれ」

母は息子たちにあつさりと告げたが、敬市は、いよいよ問題の土地だと、胸を波立たせた。兄

の顔つきも、こわばったように見えた。

「どっちを取るいうても、これは値打ちが違いすぎるからなあ」

政雄が首をかしげた。

「なんでや、評価額はそんなに違わんけどな」

敬市はとぼけてみせた。たしかに相続税額を割りだすメドとなる、固定資産評価額では、両者にさほどの懸隔けんかくはなかった。

「そんなら敬市は、京都の山を取るか」

「いや、そらあかん。ワシは兄さんとは違うて、白浜の土地には特別の愛着があるんや。お父さんといっしょに、毎年魚釣りに行つてたからなあ。あそこはワシが絶対ほしいんや」

敬市は重い荷を曳く挽馬のように、小鼻を脹らませ、声に力をこめた。彼がそうするのは、挺ていでも動かない決心をつけたときであるのを、政雄は知っていた。

幼ない頃から、敬市は押しの強い子供であつた。温和な惣領の政雄は、才槌頭さいづちを振りたて小鼻をキンキン張りに脹らませた敬市が主張するところを、うけいれてやつてきた。

サラリーマンになつてからも、敬市は突進力にものをいわせ、四十七歳の若さで財閥系一流商社の外国貿易部長の要職を占めていた。それにひきかえ、五歳年長の兄は、このところたいして業績のすぐれない繊維会社の総務部次長に先頃昇進したばかりであつた。

政雄はとりわけ才幹におくれを取る人物というわけではなかったが、入社した会社が発展しな

かったため、人事交流停滞の泥沼に足をとられたのである。

いずれにしても、不運な政雄は強運に恵まれている敬市と向いあうと、意気あがらない気持ちになった。京都の雑木山は、幹線道路からも遠く、近所に目立った市街地がない。京都市内にはちがいがなかったが、瘦せこけた松や椎などを生やした岩山は、時価にすればせいぜい五百万円ぐらいのものであろうが、売りに出したところで、いつ買手がつか見当もつけ難い。

いっぽうの紀州白浜町の土地は湯崎温泉の南に隣接する眺望のいい傾斜地である。難波で宝石商を経営するかたわら、イスラム教を研究する町人学者として有名であった父が、静養の場所としてえらんだとき、温泉の採湯権も得ていた。

七、八年前からしだいに顕著になりはじめていた土地ブームは白浜にも及び、森田家の所有地も別荘地として最適というところから、目先を狙った不動産業者らに狙われ、売却を懇請に芦屋までたずねて来た者も、二、三にとどまらなかった。現在の価値は、捨て売りにしても二千万円というところである。

「どっちかひとつずつという、値打ちが違いすぎるし、俺ひとりやったら敬市の強^たつての希望やから、言い分通したつてもええが、いまは家族の手前もいろいろるそうてなあ。いっそ、どっちもわれわれ二人の共有ということにしようか」

おとなしい政雄は、いきりたった敬市の顔を見ると、つい譲歩してやりたくなかったが、まもなく嫁がせねばならない娘と、大学進学を翌年に控えている息子の姿が頭にちらつき、思いとどま

った。

「共有やて、そんなことはいかん」

敬市はにべもなく拒んだ。

「そら、ワシと兄さんとの間なら、ひとつの不動産を共有してたかて、波風は立たんわいな。そやけど、お互いの後ろには、いまいいはった通り、家族がいよる。うちの家族と兄さんの家族とは、ワシらのようにはしっくりいかんわな。半分他人みたいなものや。万一、兄さんかワシかがコロッといつてしもうたら、あとに残った者が共有関係を引き継ぐわけやが、こらうまいこと行くわけがないわ。仮りに一方が共有物件を処分したいと思うても、一方が反対したら売ることでもできん。そんな、親戚関係の将来に禍根を残すような取り決めは、しとくことできんなあ」

なるほど、と政雄は敬市のいうところも尤もであるとうなずく。

「兄さん、たしかに京都の山よりこっちのほうが、値打ちはある。それはワシも認めるんや。それで、妥協案を出すんやが、ワシが白浜の土地を貰うかわり、二百万円ほどの株券を兄さんに渡すわ。そうしたら、嫂さんらに顔立つのと違うか。舟酔いに弱うて釣り嫌いやった兄さんと、休暇になれば親父とふたりで白浜で過したワシとは、あの土地に対する愛着いうものは、まったく違うわなあ。あそこはワシが貰うたら、親父への供養にもなるんや」

政雄は、敬市の持ちだした条件が、自分にとって不利に傾くものであることは分っていたが、同意した。彼は昔から利発で両親に愛されていた弟に、事にのぞんで譲歩してやるのが、習慣と

して身についていたのである。

三年が経った。敬市は同期の朋輩たちのトップを切って、商社の取締役に就任していた。政雄は繊維会社を停年で退職し、宝塚の自宅のさほど広くない庭に野菜を栽培し、鶏を飼って暮らしていた。山芦屋の母の許へは隔日に通い、庭木の手入れや家屋の傷みの手直しなどをしてやり、マンションの家賃の集金や、住人たちの苦情を聞く役も引き受けていた。

ときたま山芦屋を訪れる敬市は、新調の背広の胸を反らせ、細身の葉巻などくゆらせながら、忙しげな早口で母と世間話を交すいっぽう、萎えくたびれた作業服を着て庭をはいたりしている政雄を、うとましげに見やり、「兄さんも一度の花咲かす働き口、見つけたらええのに。なんなら探して来ませ」

などといった。政雄は手を振り、ことわるのが常であった。

「敬ちゃん、会社勤めはもう飽いたよ。停年からあとはのんびり暮らすんや。死ぬまではなんとか食うて行けそうやし、そのうえの望みはないからなあ」

政雄は自分の映えない姿を恥じもせず、運転手に最敬礼されて自動車に乗りこみ、あたふたと戻ってゆく弟を見送るのであった。

政雄は企業という人間集団のなかで、巧みに権力者に接近し、自己の能力を機会あるごとに顕示して、派閥の主流に納まるというような、手管を弄することで日を送る人生には、本来肌があ

わない人物であつた。別段狷介^{けんかい}の性でもないが、家に閉じこもり、できるだけ他人に会わずに暮らしていたのである。世捨て人のような政雄と、世界の経済場裡で活躍する敬市を見くらべると、運命の明暗をはっきり分けあつたきようだいのように見えるのであるが、内実はそれほど差のあるわけのものでもないのが、人生のおもしろみであるともいえた。

敬市は、父の遺産である証券類を二等分したとき、政雄の手もとに値動きの乏しい基幹産業の株や、利回りを楽しむだけの社債、国債などを押しつけた。自分はそれらと対照的な、値動きの激しい商社、電気産業、機械、不動産関係の値嵩株を取った。

手のうちにころげこんだ株券で、敬市はボロ儲けをたくらみ、一時は激しく株式の売買をした。サラリーマンにとって、日常の業務にさしつかえなく、電話ひとつで利殖をはかれる行為といえ、株式の売買ぐらゐのものである。

信用取引の空売りや空買いで大金を稼ぎ、調子にのつて小豆相場にまで手を出したこともあつた。景気はまだ短期波動をくりかえして、不況の期間は短かく、利殖のチャンスは頻々とおとずれてきていた。

それでも、敬市の持株の証価は徐々に縮小し続けていた。彼のような明敏な男でも、投機の角逐の熱気に溺れていると、儲ける機会よりも損をする機会のほうが、遙かに多いという単純な事実を忘れ去ってしまう。

いまでは、敬市は遺産の株券のほとんどを失い、自宅を担保にした借入金さえこしらえてい

た。

敬市はそれでも白浜の土地が値上りを続けているために、心の安定を失わずにいたことができていた。相続を受けたとき、坪七、八千円であった地価は、その後も鰻上りうなぎを続け、いまでは三万円になった。売る気にさえなれば、いつでも引きとるといふ不動産業者も多かった。証券取引の損害をカバーして余りある値上りである。

「人生は勝負じゃ、損せな得とは取れん」と敬市はひるみかけた気持をふるいおこし、うそぶくことができた。

考えてみれば、地価の高騰という現象は、再生産ができない商品であるとか、高度工業国家としての開発事業の影響であるとか、核家族化による所帯数の増加など、原因はいくらかもある。

だが、それらの理由はいくつ重ねてみても、天井知らずの値上りを続けてゆく、あきれるほどの長い土地ブームの説明には、ならなかった。僅か三年の間に、白浜の海岸地が四倍に値上りしたことに、敬市が内心で、「ふしぎや」という感想を抱いても当然であった。

サラリーマンが、一生貯蓄に励んでも手にすることの難しい大金が、渺ひようたる僻陬へきそうの別荘地を持っているだけで、たやすく儲かるのである。全国にあふれている投機性の資金が、土地にむかって波うち押しよせているのだと、敬市は思った。貿易収支は例年の黒字続きで、紙幣の増発率は勢いを増すばかりである。あまりの値上りのテンポの早さに、もうここらが天井かと敬市は白浜の土地を手放す気になるが、もう少し様子を見ようと持ちこたえてみると、三ヵ月も経つうちに

は様変りするほどの高値に押しあげられてゆく。

「いまの土地は、江戸時代の小判の役目をしている」と経済史に明るい敬市の友人はいった。

「江戸時代には、小判や小粒などの貨幣は、いまの百円玉のように庶民の間を流通しているものではなかった。それらは権力者の手もとに集められ、庶民は金札や銀札をあてがわれた。札は、増発すればインフレで価値が下る。相対的に金貨の値はインフレに並行して高騰した。世間の富はこんなぐあいに、巧妙に権力者に吸い寄せられて行ったんや」

白浜の土地が値上りしたように、政雄の持っている京都の雑木山の地価も、めざましい高騰を続けていた。値上り幅からいえば、白浜を遙かに上回っている。山裾の広大な竹林が伐採され、数万人の居住者を擁するマンモス団地が建設されたためである。三町歩の山を一億円で譲ってほしいと交渉に来た買手を、「金が手に入っても、使い道がおまへんので」と政雄は断っていた。

長女を嫁がせたあと、政雄は妻と二人でひっそりと暮らしていた。息子の慎吉は国立大学の工学部を卒業して、建設会社に勤めている。生活費は預金の金利と、相続したあと手堅く持ち続けている証券類の配当金で賄うことができる。

敬市のように貪慾に立ちまわらなかった彼に、望むこともなかった晩年の幸運が、おとずれてきているといえた。

昭和四十六年の春、山芦屋の家で亡父の七周忌の法要が催された。大商社の常務取締役業務部

長に榮進した敬市は、血色のいい頬を光らせ、鷹揚な態度であたりを睥睨した。兄の政雄をさしおき、上座を占めた敬市の前へ、親戚の男女が挨拶にゆく。

「近頃はたいしたご出世で、新聞でもお名前をよう見掛けますが、輸出ブームの立役者でお忙しいことですよろなあ」

「ほんまに、私から見たら眩しいような時の人になりはったわ。敬市さんは親戚一統のほまれでっせ」

敬市は、彼に向けられるさまざまな阿諛に、笑顔で愛想よく応対する。

「いや、役職はついても忙しいなるばかりでしてなあ。自分の自由になる暇というものが、まったくございまへん。母親のことも、寄る年波で気にはなるんですが、様子見いに寄る間も、まならんのですわ。まあ、おかげで、こっちが森田家の有能な國務大臣の役を勤めてくれてますので、私も安心ですけどなあ」

敬市は、傍の政雄をかえりみて、腹をゆすって重役らしい太い笑声をひびかせた。

「こらほんまに、政雄はんは細こう氣のつかはる人やから、お母はんの面倒はよう見てくれはる。こら、ええ取りあわせやわ。芦屋のことは、兄さんに任せときなはれ」

ふるまい酒にいささか酩酊したらしい老人が、笑いながらながしめで政雄を見た。

政雄は、その目付きに嘲りの色がかくされているのを敏感に覺ったが、おだやかに笑い返した。